

「粘土場による幼児造形教育とICTで繋ぐ地域連携」

前嶋 英輝
順正短期大学 幼児教育科

本研究は、リードの「芸術による教育」を基礎において、幼児期の子どもたちが、粘土場を通して実践可能な教育プログラムの開発を行うことを目的としている。さらにこの実践の内容を中心に、ICT（情報連絡技術）によって、高梁中央保育園や地域との連携を進める。イタリアのレッジョ・エミリア市の実践を参考にして高梁市での「芸術を基盤に置いた保育実践」の可能性を探る。

研究の方法として、粘土場での幼児の造形活動の観察記録と担当保育士との対話を中心に研究を進める。基本的には、リード、ピアジェ、ワロン、ヴィゴツキー、マラグッチらの研究をもとにプログラムを構築する。

キーワード：粘土場、ICT、身体性、芸術による教育、レッジョ・エミリア

はじめに

砂場はあるのになぜ粘土場はないのか。この問いに答えるべく幼児を対象に10年前から粘土遊び教室を行ってきた。その結果、子どもたちは粘土遊びが好きであり、特に説明を加えなくても長時間集中して遊ぶことができること、粘土が大量にあることを喜んで受け入れることが分かった。そして本年度ついに高梁中央保育園に粘土場を設置することができた。

1：粘土場の目的と可能性

粘土場による教育の目的を造形支援、身体感覚の育成、芸術による教育とした。幼児造形教育学は、発達心理学、認識心理学などの関係領域と深く結びついている。粘土場で実践されるプロジェクトは、例えばピアジェの「量の認識心理学」に見られるような、重さ、体積に関する認識に深く結びついている。そればかりでな



保育園での300kgの大量の粘土による遊び

く、本年度の実践結果から粘土場自体が、実験室としての機能を備えていることが明らかになった。レッジョ・エミリア・アプローチに見られるような保育者、芸術専門家、教育専門家の共同関係が作れるならば、研究はいっそう進むはずである。ピアジェのいう「子どもの思考の独自性」は子ども自身で作り上げるのであるから、知的指導よりも「場」が必要とされることはいうまでもない。

粘土場は、ヴィゴツキーのいう「子どもの複合的思考」と、大人の「概念」とのコミュニケーションの確立に役立つであろう。大量の粘土の中で遊ぶことに慣れた子どもたちは、自分の想像と保育者の概念との接点を、粘土で形作る中で見いだすはずだからである。

またローウェンフェルドのいう表現の型の出現についても新たな発見が見られる可能性がある。触覚型の表現的タイプの子どもは、視覚型の写実的タイプと比べると少ないとされるが、粘土場から育つ創造性には、視触覚に優れた触覚型と想像力豊かに色彩を扱う発想の触覚型の子どもたちが育つことが期待できる。大切なことは触覚と視覚の優位性ではなく、感覚における均衡と動勢である。

2：粘土場の機能と実践内容

2 -1：粘土場開設までの流れ

2007年6月22日、夏至の日に粘土場を開設した。粘土場を設置した高梁中央保育園では、数年前から使用していない2階建ての建物を購入していた。そこでこの建物をレジヨ・エミリアの幼年学校のアトリエとすべく園側と話し合いを行った。その結果、工務店に依頼して、前嶋が設計図を監修しリフォームが行われた。子供用のトイレと大人用のトイレ、流しなどを設置した。この建物には裏庭があり、粘土場から直接裏庭にでて遊ぶことができる。7,900×5,500mmの部屋に5,400×3,600mmの白いシートを敷いて粘土場のスペースとした。床は無垢のナラ材を敷き、壁は汚れがよく落ちるようにビニールの壁紙を貼った。300kgの粘土（陶芸用）を搬入し、粘土槽と土練機を設置した。当面は、保育者を伴ってクラス単位で粘土場を使用することとし、粘土管理は前嶋が週一回行うこととした。

また高梁中央保育園の要請により、前嶋研究室でホームページ等を作成し、園での粘土遊びや描画活動の様子などを公開し、保護者との連携にも役立てることを進めている。

2 -2：粘土遊びプロジェクト

クレイカッター（持ち手のついたワイヤーの切りひも）、土掻き（先に鉄の輪がついた棒）、延ばし棒（小さい麵棒）、陶印（素焼きの型押し）、ステンレスヘラなどを子どもたちが、自由に使えるように準備する。

300kgの粘土をシートの上に山積みして湿布を被せ、折り返したシートで包んでおく。子どもたちは、このシートと湿布をはがしてフィールドをつくることから始める。入り口で裸足になり、粘土が上靴につかないようにする。まずクレイカッターで大まかに粘土を切り分ける。子どもたちは、この作業が大変好きである。柔らかい粘土が鋭利に切り取れるためである。続いてシートの上に粘土を転がしたり持ち上げたりしながら広げる。その後各グループのプロジェクトが始まる。

裸足になる利点は、直接粘土に手だけでなく足でも触れられる点にある。立像彫刻の制作でも重要なのは、作品がきちんと立っていることである。作品が立っているためには、重心の落

ち方も大切であるが、足がしっかりと地面をつかんでいることが重要である。このことは、粘土を踏みしめたり、地面を足の親指と小指で挟むように力を入れてみれば、大地とつながって立っているということがよく分かる。裸足で遊ぶことは、立つことの意味を自然に身につけてくれるのである。

プログラム（教育計画）としては、砂場遊びのような自由遊びを基本にしている。しかし、一斉指導ではなく部分的な活動として、次のようなプロジェクト（課題）が実現している。このプロジェクトは、粘土を対象とした身体遊びと、粘土を素材とした造形遊びに大きく分類される。

（粘土を対象とした身体遊び）

高く積もう
道をつくって歩いてみよう
大きな粘土が転がせるかな
粘土に登ってみよう
粘土を切って遊ぼう
穴を掘ろう

（粘土を素材とした造形遊び）

高い塔に住んでみたいな
臥牛山の松山城
動物園を作ろう
繋がるカバの国
恐竜の国
恐竜に乗っていこう
珍しい花の国
デパートで遊ぼう
はんこで模様

3：観察方法

レジヨ・エミリア・アプローチでは、造形活動の観察（ドキュメンテーション）を柱の一つに数えている。観察結果を他の関係者と話し合い共同性を重視する。

粘土場でも日誌「note」と観察記録用紙「sketch」を準備した。日誌には、主に子どもたちの使用時間、粘土管理などを保育者と共同で記録として残す。観察記録用紙は、クロッキー帳を使用し、子どもたちの活動を絵によって具体的に残していく。

他にもデジタルカメラ、デジタルビデオを活用してデジタルコンテンツとして保存する。

4：粘土場の設置環境と管理

4-1：人的環境

一般的に土粘土遊びが保育に取り入れられない最大の原因は、粘土管理の難しさと汚れの問題が挙げられる。さらに作品の保存を考慮すると、保存技術と保存場所が問題となる。したがって、人的環境として保育者の管理業務の理解が、粘土場の実現と維持にとって重要である。そこで保育者への情報提供と情報交換が必要となる。インターネット環境は、この問題の一助となるであろう。

また子どもたちの保護者や幼稚園や保育園の管理者の理解が欠かせない。面白い活動であることは認めるが、必要とは認めないということでは粘土場の実現は不可能である。この点でも理解を得るためのネットワークは重要である。

4-2：物的環境

粘土場の管理の要点は、粘土を適した柔らかさに保つために少しずつ交換していくことである。子どもたちが遊べば遊ぶほど、粘土は乾燥し固くなる。現在の粘土場の管理システムは、使用できる状態 500kg、水につけている状態 100kg、粘土槽で休ませている状態 200kg でランニングしていくことを想定している。粘土の量を 500kg にしている根拠は、20人ほどの子どもの体重である。一人ずつが十分に身体ごと遊べる量と考えた。

土練機は10数万円かかるため、10年先を見越した予算化が必要である。土を練る作業は、手でもできるが、過剰な業務を避けるためには是非導入したい設備である。また、この研究の中でも粘土場に適した土練機の開発をメーカーと連携していきたい。保育者は、女性である場合が多く、軽い力で安全に作業できることが必要となるためである。子どもたちに直接機械を操作させることは危険を伴うが、出てくる粘土を切り取ったり、手で練り直したりする作業は、楽しんでできる作業であり、また粘土の素材に親しむよいトレーニングにもなる。

粘土場のシートは、特別に白の防水シートを注文した。一般的なブルーシートでは、遊び場の環境として色が強すぎるし、粘土の形が見えにくいいためである。シートは2枚準備しておいて、人数にあわせて面積を倍にして使う場合もある。

5：粘土場の実践の成果

身体遊び、造形遊びのどちらもダイナミックな遊びに発展している。粘土場と個人用の1kgの油粘土との違いは、子どもたちにとって遠慮しなくてよいという点にある。子どもたちが1kgの恐竜を作ろうとすると当然ついたり削ったりするための余裕としての粘土が必要となる。自分のだけでは足りなくなり、友達とけんかになったりしている場合がある。したがって、子どもたちにとって1kgという粘土の量は不満や遠慮を引き起こしているのである。最初から700g以内の作品を作れば問題が起こらないかもしれない。しかし、平面的な作品（花やキャラクターの形など）であれば、比較的可能であるけれども、立体的な作品（恐竜やゾウ）となると積み上げが必要となり、やはり制作途中に余分の粘土が必要となる。また素材の余裕が気持ちの余裕に繋がり、発想の豊かな造形活動が見られた。

粘土場の使用後に保育者が次のような利点を挙げている。まず全員が同じ場所で同じ遊びを長時間できることは少ないのに、粘土場ではそれが自然にできている。けんかが起こらない。気になる子が活動に参加できている。いつも一人で遊ぶ子が、友達と共同で遊んでいる。これらの効果は、大量の粘土という素材がもつ受容的な力によると考えられる。

おわりに

昨年の教育基本法の改正を受けた教育指導要領の改正時期であり、今こそ図工、美術の時間が最重要科目であることを理解されなければならない時期である。幼児の造形表現は、遊びに始まって遊びに終わらなければならない。

今後粘土場管理の方法について確認し、一般的な幼稚園や保育園でも設置が可能となる「粘土場の全国標準化」を推進する。

この実践は、文部科学省平成18.19年度「質の高い教員養成推進プログラム」での岡山大学を拠点大学とした「大学コンソーシアムによる幼稚園教員の養成」の表現分野での研究に位置付けられている。また幼稚園との相互乗り入れ授業は、高梁市の「特色ある幼稚園づくり」に採択されている。